

行となるような製品を自ら創出する動きについて考察している。

第5章「イタリアのファッション製品を売るために―「イタリアン・ファッション・システム」の萌芽と絹織物業」では、政府が1920年代から継続して行ってきたイタリア発の繊維製品の流行発信の動きに加えて、1930年代に政府主体で設立されたモード公社や繊維公社等の中間団体の役割について検討している。企画や製造から展示や販売まで一括管理するこれらの公社の活動は、現代の「イタリアン・ファッション・システム」につながり、その萌芽が戦間期に形成されたと指摘している。

第6章「コモ産地企業における人絹の採用とプリント部門の導入の影響―絹・人絹織物企業 FISAC 社の経営の事例（1907-1936年）」では、コモ産地における個別企業経営分析として、大手絹織物企業 FISAC 社の事例を取り上げている。FISAC 社は、コモ産地企業のなかで唯一公的支援を受け、撚糸工程から染色・プリント工程、販売まで垂直統合することで急拡大した大企業であったが、産地内企業に不公平感が生まれ、同業者間で協調関係を築くことができなかつたと指摘している。

以上、本書の概要を紹介した。

本書で考察されたコモ地方は、現在でも絹織物産地として名高い。かつて盛んであった養蚕業は壊滅してしまい、中国などから絹糸を輸入に頼っている現状ではあるが、今もなお、絹織物に関連した企業が約600社存在している。その多くは中小企業であり、それぞれが専門的な知識や技術を有し、絹織物を製造する全工程を機能分担している。そして各企業を結びつけ、マーケティングから後継者育成まで役割を担っているのが、本書の第5章で検討された中間団体の存在である。そこが注文や相談の窓口にもなっており、たとえば、エルメスなどのブランドからオーダーを受けると、必要な技術を持った企業をコー

ディネートして、製品の製造・開発を、責任を持って行っている。両大戦間期にイタリアのファッション製品を売るために形成された「イタリアン・ファッション・システム」が発展し、今日においても機能していることは非常に興味深い。

日本もかつて、生糸や絹織物製品は外貨獲得の重要な輸出品であり、1930年代には人絹を採用し織物製品の輸出を拡大させるなど、イタリアと似た歴史を持つ。しかし現在では、絹織物産業そのものが衰退してしまっている。おそらく日本では、イタリアのように政府が主体となって、企画や製造から展示や販売まで一括管理する中間団体を設立したり、世界恐慌などの困難な時期においても、自国の繊維製品の流行を発信し続けたりすることをしてこなかったのではないだろうか。本書は、日本における織物産業の再興という観点で有益なヒントを与えてくれるだろう。

今後、戦間期から現在にいたるコモ産地を中心とする絹織物業の展開に関する考察、さらには日本とイタリアの国際比較という視座からの考察を期待したい。

山田孝子・小磯千尋編

『文化が織りなす世界の装い』

英明企画編集、2019年刊
192頁、1000円＋税

国際ファッション専門職大学
河西瑛里子

本書は「比較文化学」教育の入門書として刊行されたシリーズの4巻目であり、そのテーマは「装い」である。装うという私たちの日常的な行為の起源と展開や、人間にとって「装い」がもつ意味が、論考と座談会の形式で探究されていく。比較文化学における衣装研究としての価値も高いが、ここでは簡潔な紹介の後、本書をファッション系高等教育

機関における教科書として使用することを想定して、私見を述べる。

まず、座談会Ⅰ「装う素材と技術の発見と伝播」では、素材の発見過程と染色など加工技術の発展史を比べ、世界各地の装いを考える。論考「人はなぜ装うのか」（山田孝子）では、人類史における衣服の起源と北方進出、衣服の素材、装い方の社会学的意味と変化、という観点から、文化を超えた共通性と装うことの意味が論じられる。論考「更紗がつなぐ装いの文化」（井関和代）では、先史時代からの布の利用、布をめぐる東西交易という視点からの装いの文化が比較され、インドからヨーロッパ、アフリカ、日本と大陸、国境を越えたつながりが明らかにされる。座談会Ⅱ「地域性・社会性の表象としての衣服」では、集団や社会の規範にもとづいて選ばれる衣装には、その人の属する社会や集団の価値観や歴史が反映されていることが示される。論考「伝統ある絞り染め布をファッションとしてまとう」（金谷美和）では、素材や染色技法が多様であるインドの職人が、どのように衣装をつくり出し、どのような社会的意味を持って当事者がその衣装を着ているかが論じられる。論考「「装い」からケニアの現在を読み解く」（酒井紀公子）は、ケニアの女性がよく使う装いのアイテムの利用方法と、民族間での装いの差異を紹介し、また「装い」がもつ機能や効果を指摘する。論考「オーストラリア先住民アボリジニと装い」（鈴木清史）は、衣服や装いは身にまとう人に特定の社会的正当性や権威を表す機能をもつことをふまえて、アボリジニの装いに見られる文化的・社会的現象を取り上げる。座談会Ⅲ「現代の「装い」にみる宗教性・ジェンダー・個

別化」では、気候、宗教、ジェンダーの点から、衣服のありようと装うという行為の未来について、議論される。論考「インドを表象する装いの変遷」（小磯千尋）では、インド近現代における女性と男性の「衣」との関わりが概観され、都市部の調査から両者の装いの差が分析される。論考「「加賀友禅」という文化表象」（本康宏史）では、「友禅染」に関する研究史の整理を通して、「加賀友禅」の成立をめぐる諸問題について、比較文化史的な視点から考察される。

以上のように本書では、文献調査や現地調査にもとづく、日本も含む世界各地の豊富で多様な事例をもとに、「装う」ことについてさまざまな角度から論じられている。学生たちにはなじみが少ない国や地域もあるが、巻頭にわかりやすい地図を表示することで、よくカバーされている。

また、衣装の形態やデザインというものは、筆を尽くして文字で説明するよりも、視覚的に見た方が、格段に理解しやすい。白黒だけでなくカラー写真まで、ほぼ隔ページごとに惜しげもなく掲載されている点は、かなり学習を助けてくれるだろう。なお教科書として考えた場合、参考・参考文献だけではなく、「次に読む1冊」が挙げられていると、実際に別の書籍によって、さらに関心を深めていく学生がより増えるかもしれないと思った。

最後に、衣というのは食や住と並んで、身近な物質文化である。それだからこそ、素材だけでなく形態も各地域に固有性が存在する。しかし同時に、技術の進歩の各地への広がりや影響など時代性も見られる。「装い」にはローカルとグローバルの往来が込められているということを学ばせてくれた。